

| | |
|------------------|---|
| Title | 書評：鈴木智之著『「心の闇」と動機の語彙： 犯罪報道の一九九〇年代』青弓社、2013年 |
| Sub Title | |
| Author | 牧野, 智和(Makino, Tomokazu) |
| Publisher | 三田社会学会 |
| Publication year | 2015 |
| Jtitle | 三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.153- 155 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 目次のタイトル：「書評：鈴木智之著『「心の闇」と動機の語彙』」 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0153 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：鈴木智之著

『「心の闇」と動機の語彙：犯罪報道の一九九〇年代』青弓社、2013年

牧野 智和

私たちの社会は、1997年の神戸・連続児童殺傷事件以降、多くの少年の「心の闇」を語り続け、またそのような「心の闇」が生まれる家庭・学校・社会について多くの言葉を費やしてきた。しかしそのような「心の闇」が語られるとき、そこでは何が起きているのだろうか。また、「心の闇」という言葉を通して少年事件の動機に接近しようとする社会とは、一体どのような社会なのか。行われるべき考察がさして行われぬまま、少年犯罪という社会問題が過去のものになりつつあった頃（あるいは、なりつつあった時期だからこそ）、C・W・ミルズの「動機の語彙」論という用いられるべき概念を核として、「心の闇」が喧しく語られた1990年代（後半）の考究に取り組んだのが本書である。

今述べたように本書は少年犯罪論、1990年代論でもあるが、議論が進むにつれ、本書のもう一つの底流として浮かび上がってくるのが「理解できない他者」の排除／包摂というテーマである。この観点から本書の流れを簡単に整理しておこう。分析枠組を提示する第1章に続き、第2章では「心の闇」という表現が浮上する1997年までの報道がたどられる。第3章では、解き明かされねばならないが、決して理解しつくせないものともされる動機語りがいかなる構造を有しているのか、より精確に言えば、わかろうとするけれども「動機がわからない」という状態がいかにして発生しているのか、その論理構造を大学生のアンケートを素材にして分析が行われている。この第3章では、「心の闇」語りが孕む動機理解の困難性が、動機追究を専門家へと先送りすることになったと指摘されているが、これは逸脱者という「他者」の理解を、発せられた手がかりにもとづいて人々自身が理解しようとする「一次的理解」から専門知による診断という「二次的言説」の水準へ放逐したということ、つまりある種の理解の断念が起こったことを示している。このような理解の断念を、別様の観点から跡づけようとしたのが第4章である。具体的には、神戸事件以降における各種の事件報道において、「便利な符牒」として「心の闇」という表現が用いられるようになる過程が追われているのだが、「心の闇」が手当たり次第に用いられるようになることで、また解き明かされるべきだが決して理解されつくすことのない「心の闇」の修辞が加害少年自身によって取り込まれた舞台装置の一部と化すに至ることで、「心の闇」を解き明かそうとする社会の身構えは磨滅することになるという。第5章では、犯罪報道の（おそらく）このような意図せざる帰結に対し、「他者」の理解を専門知という二次的言説（論理—科学的モード）から、再度一次的理解（物語モード）へと差し戻すことが呼びかけられている。なぜ筆者が本書を書く必要があったのか、という疑問（？）への答えが、このジェローム・ブルーナーの概念を経由した「物語の力の呼び戻し」として示されたところで

牧野智和「書評：鈴木智之著 『「心の闇」と動機の語彙』

『三田社会学』第20号（2015年7月）153-155頁

本書は幕を閉じる。筆者は直近の論考でも、アーサー・フランクの言を引いて「人々の物語る力の衰退」を指摘していた(鈴木 2015:19)。評者には、犯罪をめぐる語りと、フランクが述べる病の語りをめぐる文脈が大きく異なることは筆者も承知のうえで、人々が何かを語るという営みをめぐる探究の一環として本書が世に出されたようにみえる。

ともあれ、本書では、「心の闇」という検討されるべき対象が、複数の観点からそれぞれ緻密に検討され、「他者」への対峙という観点から現状への説得的な対案まで示されている。本書が、今後の少年犯罪(報道)研究における一つの里程碑になることは間違いないだろう。

さて、では里程碑の先に何がありうるのだろうか。これは犯罪報道の研究を中途半端に行ったことのある評者自身に取り組むべきことでもあるのだが、本書から触発されて考えた、今後のさらなる検討課題について四点ほど挙げてみよう。

まず、本書では、分析哲学者フレッド・ドレッズキが提示した「起動原因」と「構築原因」の区別を参照し、行為の条件をなす前者と、なぜ特定の行為が反応として生じるのかを示す後者の接続が不備をきたす(理解できない、落差が大きすぎる)とき、「心の闇」という言葉を呼び寄せることになるという説明されている。この説明自体は説得的なのだが、では「心の闇」という言葉が呼び寄せられる以前においては、起動原因と構築原因はスムーズに接続され、少年による殺人という行為は理解可能なものとされていたのだろうか。評者には、殺人という行為の構築原因を理解可能とする論理を少なくともマスメディア上で成立させるのは困難であるように思える。そうであるならば、「心の闇」という言葉の呼び寄せは、集められた起動原因の選択あるいは構成ミス、もしくは起動原因と構築原因それぞれに注がれるまなざしの配分の問題(後者への過度の傾斜)にあるという理解もできないだろうか。

次に、これは外在的な観点からの細かい詰めという程度の話だが、1997年の神戸での事件に関して、考えてみたいことが二点ある。一つは、5月末の事件発生から6月末の少年の逮捕までの間、つまり「犯人」が捕まるまでの間、私たちの社会はこの事件の「犯人」をめぐる、国民的といえる規模の推理ゲームを展開していたことをどう考えるかという点である。逮捕以前に既に多く積み重ねられた報道は、少年逮捕以後の報道といかなる関係にあるのだろうか。本書のみがそうというわけではなく、評者も含め、この点はこれまでの少年犯罪報道研究における盲点であったように思える。加害少年をめぐる手がかり(「心のサイン」)が出揃う以前に、犯行声明文のみを手がかりに文脈が事前に「構築」された可能性について検討することが、「心の闇」の出所を問うためには詰められるべきかもしれない。

もう一つは、本書では三全国紙を素材とした「心の闇」報道の追跡を行っているが、犯行声明が送りつけられた当の『神戸新聞』や、新聞よりも煽情的な記事が掲載される可能性のある雑誌、もしアクセス可能であればだがテレビ番組等、当時の各メディアにおけるニュース・フレームの形成全体からみて、「心の闇」というフレームはこの事件報道の当初から、一貫して支配的なフレームであり続けたのだろうか。たとえば宮台真司が述べた「情報戦」としての「郊外化」論など、対抗言説がいくつかありえたなかで、神戸事件における支配的なニュース・フ

レームはいつ頃、どのようにして形成されたのか。先の点と合わせて、「心の闇」の発生源により分け入ることが、本書という里程標の先に残されたさらなる課題であるように思われる。

これまでに示した論点は、1997年より以前への遡及と1997年の掘り下げに関するものだが、最後に示したいのは1997年以後、特に現在の状況についてどう考えるべきかについてのものである。評者は暢気なことに、「心の闇」のニュース・バリューはもはや低落し、その意味で神戸事件から連なる問題としての少年犯罪はある面では収束したのではないかと考えていた。本書が刊行された2013年の暮れは未だそう考えることのできる時期だったように思われ、評者にはその意味でも、本書が少年犯罪をめぐる研究に一つの画期をなしたものだと思つた。しかし2014年に佐世保で発生した、高校生による同級生の殺害事件と、2015年初頭の名古屋で発生した、大学生による殺人事件においては、いずれも再び「心の闇」という表現が再投入され、評者の見立てが的外れであることを思い知らされることになった。評者のことはともかく、考えるべきことが新たに示されたように思われる。つまり、本書の分析枠組からして、ここ1年ほどの状況はどう捉えられるのか。それは未だ続く1990年代(的なもの)の延長線上にあるのか。あるいはかつてとは異なる何かが見いだせるのか。もちろん性急に解釈を示す必要はないが、2010年代に再発生した「心の闇」に再度組みつくことは、誰かが行う必要がおそらくある作業であるように思われる。その意味で、本書は1990年代論でありながら、非常にアクチュアルな著作だともいえるのだ。

【文献】

鈴木智之. 2015. 「病の『経験』とその『語り』——遡及的で非対称的な共同的解釈実践としてのナラティブ・アプローチ」『N：ナラティブとケア』6:19-26.

(まきの ともかず 大妻女子大学)